

平成 30年度 (2018)

国語 (第一回)

設問		得点率 (%)	設問		得点率 (%)
1 説明文	問1	67.6	2 物語文	問1	39.9
	問2	48.8		問2	69.1
	問3	58.1		問3	88.5
	問4	34.8		問4	21.5
	問5	85.3		問5	35.2
	問6	98.6		問6	89.4
	問7	84.9		問7	94.6
	問8	87.4		問8	83.2

<b>平均点</b>	<b>総合</b>	<b>60 点</b>
	<b>2科</b>	<b>60 点</b>
	<b>4科</b>	<b>66 点</b>
<b>最高点</b>	<b>2科</b>	<b>80 点</b>
	<b>4科</b>	<b>87 点</b>
<b>最低点</b>	<b>2科</b>	<b>40 点</b>
	<b>4科</b>	<b>23 点</b>

1 出典：中村千秋『アフリカゾウから地球への伝言』

問一 「原生自然といえる時代の人間の文化」の持つ特徴を述べている部分を探す問題です。

解答すべき箇所が少し離れているため、少々難しかったようです。

問二 「人間社会が自ら文化の首絞めを行うようになってきている」とある部分を説明する問題です。「自ら文化の首絞めを行う」とはどういうことかを説明することが求められています。傍線部の直前に「自然を資源と見立て」（19行目）「消費を拡大していくことにより、その資源すら使い尽くし」（23行目）たとありますので、「首絞め」とは人間が自然にある資源を使い尽くしてしまい、文化が成り立たなくなる事態になったことを意味します。このことを2行でまとめます。単なる抜き出しではなく設問に合わせた解答文を作ることが必要です。少々難しかったようで、ポイントが十分書けていない答案が多く見られました。

問三 「大自然と文化は共存するのでしょうか。」という問題提起に関して筆者が用意した「共存可能なしかた」とは何かを述べる問題です。筆者はこのあとで「人間世界が固執している伝統や文化を大自然に合わせて変えていく必要がある」（61行目）と述べ、その具体策として、大自然から搾取した原素材に固執せずに代替品を利用するという文化の変更を提案しています。それによって自然環境の破壊が防げるというのです（63～71行目）。これらをまとめて解答を作ります。すべての要件を満たしている解答は少なかったです。

問四 「エジプトはナイルの賜物」という比喩の意味を考えます。エジプト文明の発祥の地ではナイル川の氾濫が起きるたびに人々は水害に悩まされましたが、一方で塩害を防ぐなどの恩恵をももたらしてきたのです。それがピラミッドに象徴される古代文明を形成する背景に

あったのです。ところが、アスワンダムという人工物を造り河川の氾濫を防いだことで、それより大きな恩恵が失われてしまったという訳です。これらのことを 2 行でまとめます。難しかったようで、氾濫を防ぐことで恩恵が失われたことが理解できていないような答案が多く見られました。

問五 「自然と共存しているもの」の例を探す問題です。概ね良好でした。

問六 接続詞を選択する問題です。ほとんどの答案が正解でした。

問七 漢字の書き取りです。楷書で丁寧に書く必要があります。概ね良好でした。

問八 本文の内容に合うものを考えます。アは本文で話題にしていることではありません。ウは「自然破壊の背景」として「人間を自然の一部とみなす考え」を挙げているのがおかしい。そういう考え方が出来れば人間と自然は共存できるものしてあげられています。エは「アフリカの大自然が減びても地球全体にはすぐに影響はない」という考え方は筆者によって否定されています。概ね良好でした。

## ② 出典：河合二湖『金魚たちの放課後』

問一 「あのむちゃな思いつき」の内容を答えます。蓮実の両親はボストンに転勤になり、蓮実もついていこうと考えていたようです(74 行目)。しかし、そのことを知った花音は、蓮実を卒業まで家においてほしい」と自分の家族に熱心に頼んだ(3~10 行目)とあります。これらをまとめます。採点してみると文として不安定なものが多くみられました。主述や係り受けをしっかりとすることが求められます。

問二 二か所ある空欄に当てはまる同じ言葉を自分で考える問題です。いずれも蓮実が母の質問に対して強く否定する場面です。

問三 「絶対的な味方」として蓮実が考えているものが入ります。次の段落にある「お母さんやお父さんの死への恐れや、その次の段落にあるボストン転勤に同行したいと言った思いは「家族」こそが「絶対的な味方」と考えていることのアかしになるものです。

問四 心情の変化を風景描写によってあらわそうとした場面です。実際の風景というより心の中に映った風景が描写されています。傍線部の直後にあるのは蓮実が花音の考える「絶対的な味方」が自分であることに思い至ったことが述べられています。この表現はその心の動きを暗示させ、話を切り出すきっかけとなっているのです。花音にとって学校とは絶対的な味方のいる場所であると気づいたわけです。解答はこれらをまとめます。「泣く」「涙」などの読み違いの答案が多く見られました。

問五 蓮実が花音の気持ちを察したうえで自分の思いを述べようと決したことを意味する表現です。このあとに花音に対して自分の考えを述べている場面が続いています。「みんな、ずっとここにはいられない」(117 行目)ことを踏まえたうえで、蓮実は花音に「この先も友だちでいてくれたらうれしい」(127 行目)と思っているのです。なお、解答文が話し言葉になっているものが多数見られました。

問六 成句の問題です。「打つ」が関係する語から出題しました。概ね良好でした。

問七 副詞を補充する問題です。ほとんどの答案が正解でした。

問八 本文の内容に合うものを選ぶ問題です。正解はウです。アは「父親こそが自分の心強い味方だと確信している」が本文中にはない表現です。イは母親が「自分の子どもころの話を交え、友情の大切さを説く」という話が文中にはありません。ウは「お母さんたちに遠慮しないで答えて。卒業まで、今の学校にいたい？」（15行目）とあつて判断を蓮実任せようという態度であることが分かります。その点でこの選択肢が正しいことになります。エは蓮実が「ボストンに行く決意がゆれはじめている」ことはなく、あくまで離れても友達でいたいという気持ちを花音に伝えようとしている点に注目します。概ね良好でした。